日本英学史学会広島支部

ニュースレター

No. 29

日本英学史学会
広 島 支 部
平成 12（2000）年
6 月 10 日

支部総会、例会開かる

支部総会が去る 5 月 27 日（土）午後 2:00 より、松岡博信先生のご配慮とご尽力により、 安田女子大学で研究例会に先立ち開かれ、支部活動報告（小篠敏明、竹中龍範理事）、会計報告（松岡博信理事）、会計監査（山本勇三、馬本勉監査）、年間計画（小篠敏明理事）が提案され、原案通り承認された。

引き続き行われた本年度第 1 回（通算第 42 回）研究例会では、24 人の会員が参集し、実り豊かな研鑽の集いとなった。

研究発表『英語教育関係者の英語会とスピーチに対するスタンス—岡倉由三郎と神田乃武を中心として」（田村一郎先生司会）では、三熊祥文氏が、岡倉と神田の英語会とスピーチに対する考え方についてご研究の成果を発表された。

研究発表「パーマー著 *The Standard English Readers* と岡倉著 *The Globe Readers* について」（河口昭先生司会）では、小篠敏明氏がパーマーと岡倉の教科書の特徴と違いについて研究の成果を報告さ

れた。

特別研究発表「山本忠雄博士の「滞英日記」について」（寺田芳徳先生司会）では、伊東弘之先生が最近新たに発見された山本忠雄先生の滞英時代の日記を資料として、先生の英国観、英語英文学研究に対するお考えなどについて発表された。

研究発表会の後、「白木屋」行われた懇親会では、多くの会員が集まり、定宗相談役、寺田支部長を中心に歓を尽くした。

三熊先生のご発表を聴いて

英語スピーチの大家、三熊先生ならではのご研究

鉄森令子

「スピーチ」に関しては全く関心もなく知識もありませんでしたが、昨年秋に岡山で行われたスピーチ大会で審査員として参加されていた三熊先生にお会いし、「スピーチ」に興味を持ちました。英学史学会で「スピーチ」に関するご発表ということで、現代の「スピーチ」と「歴史」がどう結びつくのか、楽しみにしていました。

文教女子大学の三熊先生は「英語教育関係者の英語会とスピーチに対するスタンスの検討—岡倉由三郎と神田乃武を中心にして」というタイトルで、英学史上における岡倉由三郎と神田乃武のスピーチに対するスタンスから現代の英語スピーキングに関わる意義とその位置づけを試みた御研究をご発表されました。

英語教育の理論家として「教養的価値」と「実用的価値」を英語教育に求めていた岡倉由三郎は、英語そのものの学習意識から少し離れた実践や自国文化を相対化する、「英語によって我々は、日本語、日本の国、日本の心を更によく知る事が出来るのである（1918 年 11 月 22 日の東京高師英語会）」といった知的訓練を期待していた。また、英語会へのコンスタントな参加、即ち 1922 年 9 月 30 日関西学生英語演説大会における模範演説等、数多くの実践の実績という事実も含めて、特に実用的価値論の立場から英語会への期待は極めて高いものであったと結論づけることができるであろう。理論家として知られる岡倉由三郎の実践振りを知ることができ、彼の教育論が単に机上だけでなかったことを感じた。

神田乃武とは、『神田英語読本』の作成、グアンメソッドの導入等、英学史の上でも重要な立場にある人物である。また、神田自身がスピーチの達人であったのでその成り行きとして英語会の活動に広範囲に参加し、コメントをし、スピーチを披露している。そういった神田乃武はどのようなス

タンスを持っていたのか。彼は英語会に対して、主に耳慣らし、英語の雰囲気作り、ドリル、発音訓練などの観点から、やはり大きな期待を寄せていたようだ。二人の英語会に対するスタンスは「期待はしている」けれどもそれは主に「慣れ」の場としての英語会であり、drill の場としての英語会であり、内容や教養的価値を意識する場合でも、自らの文化を相対化させるための視点として用いる、程度の認識だったようであり、「学習装置」としての認識はない。

こういった「スピーチの歴史的研究」に関するご発表に対する質疑応答の中で、二人に関わらず当時の英学者たちは自分の思想を英語で（口頭及び文章にて）発表していた。このようにスピーチ（人前に立って自分の意志を発表する）活動は１００年以上も前から行われていたが、その理論が議論されだしたのは平成になってからである。世界的にも再度、「スピーチ」を見直す時期がきているのではないか、とまとめられた。英学史の上でもかかすことの出来ない人物、岡倉由三郎と神田乃武の二人のスピーチに関するスタンスのご研究はとても価値あるものであったと思います。今回のご発表を通じて、自分自身の今後の課題を見つけることが出来ました。岡倉由三郎とはどういう人物であったか。岡倉の主張した「教養的価値」と「実用的価値」の２つの観点から論じられた『英語教育』とはどのようなものであったか。　神田乃武はどのような英語学習を行い「英語スピーチの達人」になったのか、そして、彼が執筆した数多くのリーダーとはどのようなものであったのか等々。また、ご発表の中で出てきた「学習装置」という言葉が今ひとつ理解できませんでしたので、今後調べてみたいと思います。

三熊先生のご発表によってこれまでとは違った新たな世界を広げることが出来たことに対して感謝しています。どうもありがとうございました。

小篠先生のご発表を聴いて

「文化対立」というシャープな切り口

馬本　勉

「パーマー著　The Standard English Readers と岡倉著 The Globe Readers」と題する小篠先生のご発表は、「文化対立」というシャープな切り口で教科書を比較した、大変興味深いご研究であった。

小篠先生は、まず Nunan and Lamb（1996）の High structure と Low structure の対比から話を始められた。教授者主導型の前者と、学習者中心の後者とのコントラストが、そのまま岡倉とパーマーの教科書の対比に当てはまるという。　岡倉の教科書は、１）読み方活動中心。文章を味読し、英

米文化の鑑賞を中心とする。2）英米欧の文学、文化内容の重視。3）文学文体、英詩の重視。4）教科書全体に一貫したストーリーを設定、といった特徴を持ち、日本人英語教師が「教え易い」と感じさせる、教養主義的なものだと言う。

一方パーマーの教科書は、1）読本が口頭学習および書き方学習と一体となった一つのシステムを構想。2）オーラルメソッドの技法を活用。3）発音記号版等音声の重視。4）科学や日本固有の題材を多用。5）多用な文体（英詩なし）。6）口頭→書き言葉→原点、という特徴を持ち、実用主義に価値が置かれているという。現在の教科書は、みんなパーマーの教科書のようになってしまった、と小篠先生は語っておられた。

今回のご発表は、平成９～１１年度にかけて文部省の科学研究費の補助を受けて実施された「明治・大正・昭和初期の英語教科書に関する質的研究」の一環である。当日配布された資料には、パーマーの教科書 10 巻、岡倉の教科書 5 巻それぞれについて、題材内容、語彙、文法、その他の項に分けて、極めて詳細な分析がなされており、当時の教科書の実相が見事に浮彫りにされている。回覧された科研の報告書（他の教科書の分析を含む）の詳細で膨大な分析結果には目をみはるものがある。ぜひ公刊されることを願う。

いくつか挙がった質問は、岡倉の教科書にも「パーマー的な」ところがあるのではないか、という点に集約できるであろう。小篠先生のご回答は、発音表記（岡倉は綴字と発音を結びつけるフォニックス的な表記、パーマーは音声学的な表記）を含め、やはり質的な相違は著しく、それは四技能全体をバランスよく習得させようとするパーマーと、読書力を中心とした文化教養的価値を重視した岡倉との、到達点の相違が大きいということであった。

しかしながら、岡倉の名著『英語教育』に示された初期段階における耳と口の重視、あるいは岡倉が留学先で学んだであろうダイレクトメソッド的なものを考えるとき、両者の英語指導における考え方は、その根底において共通点がないとも言い切れない。岡倉が The Globe Readers を書き上げたのはパーマー来日の十数年前である。このとき、両者の「個人レベルでの文化摩擦」はまだ生じていない。とすれば、小篠先生ご指摘の鮮明なコントラストの裏側に、両者に通底する思想を読み取ることが可能かもしれない。今後さらに質的な解明を深められる上で、大変有意義なディスカッションが展開されたと思う。

未だその全貌が明らかになっていない「日本の英語教科書史」の解明に向け、
今回の小篠先生のご発表は大変大きな役割を果たしたと言えるであろう。英学史学界挙げての大事業「英語教科書史の解明」。その一端でも担えたら、と願う者のひとりとして、パーマーの教科書の復刻を願ってやまない。（馬本　勉）

伊東先生のご発表を聴いて

眠っていた資料に命を吹きこまれた

河口　昭

伊東弘之氏の特別研究発表、「山本忠雄博士の滞英日記について」は、氏の調査研究により眠っていた資料に生命が吹き込まれた点でまさに特別なものであった。山本博士は昭和 28 年 *Growth and System of the Language of Dickens: An Introduction to A Dickens Lexicon* により学士院賞を受賞。昭和 40 年には英国などに研修旅行に出かけている。今回の伊東氏の発表は博士がその旅行中に記した「滞英日記」に関してであった。

これは伊東氏が博士の没後、平成 9 年 11 月東大阪の山本博士卓を訪れた際、見つかったものである。便箋一冊、ノート一冊に滞英中の Quirk とのやりとりや E. Patridge に Dickens Lexicon の完成を望まれたことなどが記されており、誠に興味深い。特筆すべきは、「滞英日記」と共に西洋紙を四つ切りにしたものや、卓上カレンダーを利用した Dickens Lexicon の為のカードが多数発見されたことである。伊東氏は山本博士の業績について、英語学、英文学の水準を海外の学者に示したことにるとしているが、来年にも CD ロムの形で日の目を見るであろう Dickens Lexicon により山本博士の業績が一層確たるものになると思われる。なお、「滞英日記」は 6 月末、渓水社より刊行の運びとのこと。伊東氏の労を多とすると共に、氏の終始一貫した真摯な研究活動に深甚なる敬意を表す次第である。

『英学史論叢』発行と原稿募集について

竹中理事のご尽力により、『英学史論叢』第 3 号が発行されました。第 4 号に向けて会員の皆様の積極的な投稿をお願いいたします。研究論考、英学史随想、英学史時評、書評等、何でも自由です。多数の応募をお願いいたします。送り先は竹中理事まで。3月末日締め切りです。詳しくは次のの執筆要項をご参照ください。

『英學史論叢』執筆要領

・『英學史論叢』に載録するものは研究論考およびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。

・研究論考、その他のものとも、提出されたものをそのまま複写印刷するものとする。手書き、タイプライターやワープロによる印刷など、いずれもＢ５判用紙を用い、上下左右に 2.0～2.5cm 程度の余白をとった完全原稿を提出するものとし、執筆者による校正は行わない。用紙は白紙を用いるものとし、原稿用紙等罫線のはいったものは受理しないことがある。

・研究論考は日本英学史学会広島支部研究例会、日本英学史学会本部月例会および年次大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副３通を提出し、編集委員会の査読を経て掲載の可否、書き直し等を決定するものとする。なお、編集委員会は必要に応じて編集委員以外の会員に査読を委嘱することができる。

・研究論考は参考文献・資料・図版等を含め、８ページ以内とする。

・その他のものについては、英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿および事務局・編集部の執筆依頼によるものとする。なお、新刊書評・紹介は日本英学史学会広島支部会員の著書ならびに広島支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等、いずれも原則として２ページ以内とする。

・原稿の受理期限は、研究論考については毎年３月31日、その他のものについては４月15日とする。いずれも必着とし、遅れた場合には、理由の如何にかかわらず、次号送りとする。

日本英学史学会広島支部事務局　　小篠　敏明
〒739-8524　東広島市鏡山1-1-1
広島大学教育学部英語文化教育学講座内
Tel & Fax:　(0824)24-7058　(深沢清治)
(0824)24-7059　(小篠敏明)
郵便振替口座　　01360-9-43877
加入者名称　　日本英学史学会広島支部

会費3,000円をご納入いただきますようお願いいたします。